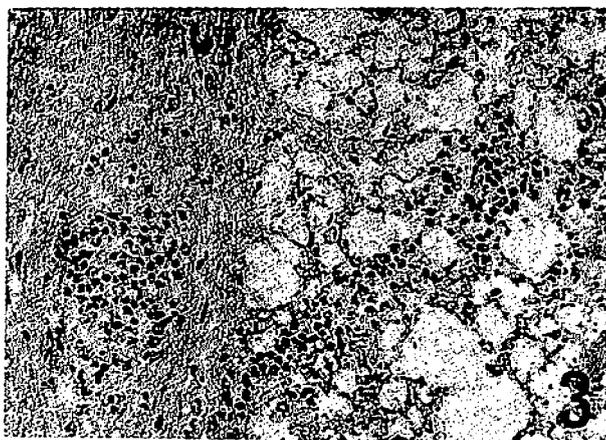
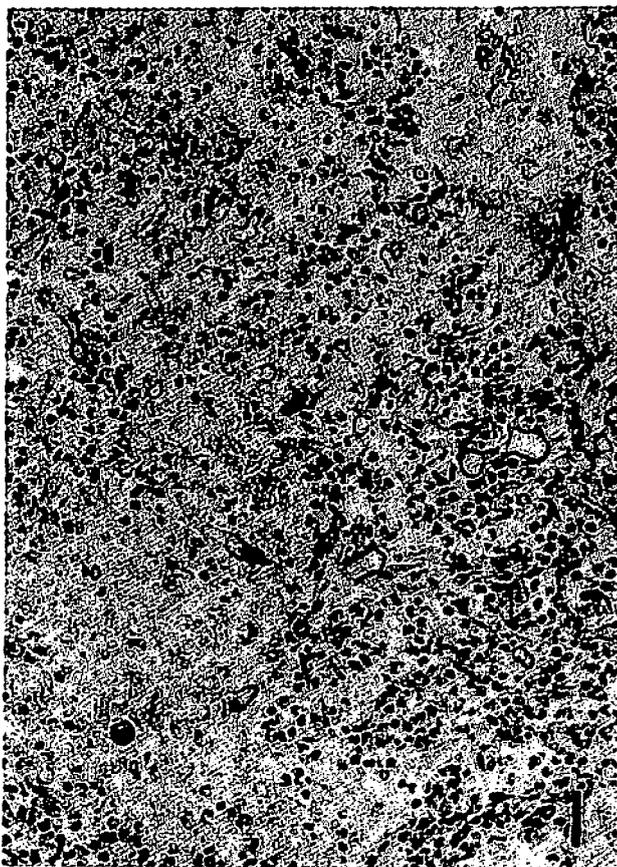


耳道感染によるムコール性髄膜脳炎

北里家衛研・北里大学出題 第23回獣医病理学研修会標本No.399



動物：フェレット，雄，2才。

臨床的事項：昭和56年に繁殖用としてアメリカから輸入された雌3頭，雄5頭中の1頭で，個別ケージで，主として挽き肉とホウレン草で飼育されていた。昭和57年6月頃から元気，食欲を失い，同年7月14日に昏睡状態におちいり剖検された。なお，予防接種はジステンパーワクチンのみ実施していた。

肉眼所見：採脳時，左側内耳部から小脳および脳幹部（橋，延髄）にかけて，境界不明瞭な乳白色の融解病巣が形成されていた。またその病変は左側外耳に連続し，粘膜の陳旧な潰瘍を伴っていた。その他おもな病変として出血性化膿性腎炎，膀胱出血および脾腫が見られた。

組織所見：小脳および延髄の前額横断切片で，病巣は左側三叉神経根周囲および小脳側面髄膜の線維性肥厚とともに，組織の崩壊壊死および化膿性病巣を基本に構成されていた。さらに，多数の好中球およびその崩壊細胞並びにマクロファージに混じり明らかな菌糸の感染が見られた（写真1）。このような病変は顔面骨髄および外耳粘膜下組織に見出された。また化膿性の髄膜病巣に隣接した小脳辺縁および三叉神経根部の脳実質内において，

脱髄と伴に菌糸を中心とした好中球の小集簇巣が形成されていた（写真3）。菌糸はH.E.染色で好酸性にその輪郭が染め出されていたが，その菌形状はPAS染色やGrocott染色でより明らかに指摘することが出来た。不規則に分枝した菌糸には隔壁は認められず，しばしば血管壁や腔内に侵入していた（写真2）。かかる所見はムコール属真菌の特徴を備えていると見做された。尚，肉眼的に見られた腎および膀胱病変はいずれも慢性経過を示した細菌の参与による化膿性炎症像を呈していた。

一般に真菌感染症の場合，常に問題になるのは侵入場所と発症誘因であろう。本症例において頭部，特に耳周辺の組織を中心に病巣が形成され，菌糸を伴う外耳上皮の剝離，上皮組織における化膿性病巣が指摘されたことは，その発生に対し耳道感染が強く想像される。さらに発症誘因として，真性糖尿病や腫瘍などの慢性疾患による個体の衰弱乃至免疫異常あるいは抗生物質の投与による菌交替現象などが知られているが，本症例における定形的肉芽腫形成の欠如は腎病変との関連を否定することは出来ないであろう。

組織診断名：耳道感染によるムコール性髄膜脳炎。